

ベルクソンにおける実在と直観

文学研究科哲学専攻博士後期課程1年

小林 剛

・序論

我々は日常の生活で様々な経験をし、多くの感情を抱いている。それは感動でも酷い不安でもさまざまである。そして日常では、様々な感情を同じ言葉で呼んでいる。だが少し考えてみれば、試験前の不安と自分の将来をふと思ったときの不安は、同じ不安と呼んだとしてもその内実は大きく異なるだろう。さらに言えば、そもそも試験前に不安だから胃の辺りが苦しいのか、実は食事を少ししか取らなかったため空腹で胃の辺りが苦しいのか、感覚だけでは判別がつきにくいのではないか。感じているのは不安であるというより、胸のあたりの独特な感じという他ないような事態ではないか。

我々はこの常に異質で独特な感覚に同じように既存の言葉を当てているのだが、不安や空腹と呼んでいる感覚や経験の形は元から決まっているものなのだろうか。またもしそうでないなら、そうした独特な感情の現れを既存の言葉で型どられずに、「それとして経験する」ことは可能なのだろうか。さらにベルクソンの考えに従えば、こうした内的な感情についてだけでなく、外的知覚についても事態は同じであることになる。「もの(chose)とその環境との分離は、絶対的に明確なものではありえない。(…)それはただ欲求の示唆と実生活の必要だけにしただけで、延長物の連続の中に区画を引くのである」(MM235)¹。我々が物体としてもものを認識する時、そこには既に実在に対する恣意的な変容が行われていると言うのだ。

しかしそうして言語になる以前の経験を人は捉えることができるのだろうか。ベルクソンが『物質と記憶』において、有用なものではなく直接的なものとして「直観(intuition)」という言葉を使えるとき、それが可能であり、またそうした根本的な経験を生きることの重要性を述べているように思われる。さらにそこで語られる知覚論においては、内的な感情だけでなく、外的な物質の知覚においても、形になる以前の経験、人間的経験の背後にあるものの「直観」が述べられている。とりわけ本稿では、「知覚」で生じている事態が問題になる。

本稿では『物質と記憶』のイメージ（1章）、純粹知覚（2章）、事実上の知覚（3章4章）といった知覚論を経由しながら、直接所与を捉えるものとしての直観（5章）、知覚における微積分（6章）、不可分な連続としての運動（7章）という構成から、『物質と記憶』における人間的経験の前の直接所与としての「直観」と「実在」とはどのようなものか明らかにするため、この問題について考察を深めたい。

1. イメージ

直観の話に入る前に、まず単純にはあるが、ベルクソンの知覚論において重要な「イメージ（image）」や「純粹知覚（perception pure）」について述べたい。

『物質と記憶』の冒頭から述べられる「イメージ」であるが、それはいかなる目的の元に導入されたのか。まず問題になるのは、我々の認識とその対象との関係である。ベルクソンは第7版の序文で次のように問いを立てる。もし我々が見ている対象が精神の内にしかないと言うなら、個々人の中で別々に表れている表象に他者との間でズレもなく一致するのは何故か、という問題が残るだろう。また逆に、唯物論的な科学が述べるように、全ては物質の因果的連鎖による運動から説明されるものであって、我々の表象もそうした分子運動の結果であるとするならば、それは脳の中で表象が作られていることになるのだろうが、そうすると何故分子の運動が表象になることができるのかといった問題が残ることになる。このように唯物論的実在論と唯心論的観念論の困難を示し、それを批判する。またこの問題のカントによる解決では現象とは異なる物自体という存在を想定することになり、その結果存在とその現れは全く別のものになってしまう。そうではなくベルクソンは我々が感覚を開けたときに知覚されるようなイメージは、「対象はそれ自体において存在し、また他方、対象はそれ自体において我々が知覚する通り生彩に富んでいる」（MM2）ということを示すためのものであると言える。

それはいかなるに正当性をもつのだろうか。よく知られているように『物質と記憶』の第1章の冒頭は物質や精神に関する諸理論を知らないものとしようといった上で、「ここでイメージというのは、私が感覚を開けば知覚され、閉じれば知覚されなくなるような、最も漠然とした意味でのイメージのことである」（MM11）という文章から始まる。そして続けて「これらのイメージはみな、そのすべての要素的部分において、私が自然法則と呼ぶ一定不変の法則に従って、互いに作用と反作用をしあっている」（MM11）と続くことになる。後半の文章は何やら物理法則について述べているようであるが、これだけではイメージという言葉が具体的にどんなものなのかははっきりしないように思われる。そこでこの先の叙述を見てみると、「物質的世界を措定すると、イメージの総体が与えられる」（MM31）といった表現が見つかる。ここで留保付きではあるが、とりあえず「イメージの総体」が「物質的世界」の言い換えであり、「イメージ」が「物質」の言い換えであることが確認でき

るだろう。

しかしなぜイメージと言ひ換える必要があるのだろうか。はじめにあるベルクソンの文章を見てみよう。

「実際、どんな心理学者でも、少なくとも物質的世界、つまりは万物の潜在的知覚の可能性を想定せずには、外的知覚の研究に手を付けることはできない」(MM36)。

ここで問題になっているのは科学的心理学が人間の知覚を考察する際の可能性の条件であり、ベルクソンによればその条件をなしているものは「万物の潜在的知覚の可能性」の「想定」であるという。例えば、一般に我々が知覚の科学的研究として思い描くものを考えてみよう。科学者は「神経」にそって伝わるような刺激やそれが伝わる「脳」の「知覚中枢」などを取り上げることになるだろう。そしてベルクソンが言うように、「刺激」や「脳」、「知覚中枢」と言った物質的存在が知覚可能な何かであると想定していなければ、科学者はこれらについて語ることも研究することもできないだろう。ここで科学者は物質的世界を想定しつつ、物を知覚するということは何らかの物理的なものが我々の感覚にそって伝わること、そしてさらには原子の振動と知覚を関連させることだろう。

ベルクソンは「求心性神経の通常の役割は、運動を脳や脊髄に伝えることであり」また「遠心性神経はこの運動を末端に送り返す」(MM16) 役割をしていると述べた上で、「私は、外部の対象が求心性神経に、中枢へと伝わる興奮を起こさせること、中枢は多様を極めた興奮の舞台であること、この運動は対象の性質や位置に左右されることを知っている」(MM17)、と先の事実を肯定している。しかし私の知覚がこうした分子運動に依存しているからといって、知覚はこの分子運動を翻訳するものであり、結局のところ私は脳髄の分子運動以外には何一つ表象してはいない、と結論することはできないとベルクソンは言う。

そしてこのことが、イメージを外部に立てることの正当性に繋がる。というのも、知覚の外で生じつつある知覚を生み出す過程についていかなる説明を試みたところで、その過程が具体的にはどのような知覚についての記述であるのかは、当の知覚が与えられていなければいっさい同定できないままになってしまうからだ。知覚の個別的な場合について語りだそうとした途端、その語りはイメージとしての知覚そのものに依拠しないわけにはいかないだろう。ベルクソンはそのことを光点Pの例によって論じているⁱⁱ。

2. 純粹知覚

こうして物質世界はイメージの総体であることになる。ではこのイメージに対して知覚はどのように働きかけるのか。ベルクソンの知覚論は外界から孤立して立てられた主体、或いは物質のみから出発して意識を導出するような古典的な認識論ではなく、イメージの

ただ中で知覚が成立していることを示すことを目的とする。

どういうことであろうか。まずそもそもベルクソンによればイマージュの総体というものは、一定不変の自然法則に従って作用し反作用し合っていたのであった。そうしたイマージュのみであれば「そこに何一つ新しいものは付け加わることはないはずである」(MM11)。確かにすべてが因果関係による結果であるならば、それらは既に起こったことから必然的に生じるだけだといえるだろう。しかしベルクソンはこうしたイマージュの総体の中で知覚によって外から知るだけでなく、感情によって内から知ることができるという点で、他のイマージュとはっきり区別されるイマージュがひとつあると言う。それが私の身体である。たしかに私が移動すればすべての他のイマージュ（例えば景色と言ってもいいだろう）は変化するが、私の身体は変わらないままである。さらには、私の身体というイマージュは、外部から運動を受け取り返すという点では他のイマージュと同じであるが、「受け取ったものの返し方がある程度選んでいるように思われる」(MM14) という点で特殊なイマージュであるといえる。そのためベルクソンは、私の身体を「行動の中心である」(MM14) と述べ、決して表象を産み出すものではないとする。

ここでベルクソンは以下のような説明をする。外的な諸対象の形や大きさなどは、私の身体がそれに近づくか遠ざかるかに従って変わり、匂いの強さや音の程度も距離とともに増減する。また私の視界が広がるに連れその対象は私にとってどうでもいいものになり、逆に視界が狭まって私の身体がその対象に容易に触れられるなど作用を及ぼせるようになるに従って、はっきり配列されるようになるだろう。それはつまり、私の身体が周囲のイマージュから引き出すことのできる利益によって示唆されているということである。そのためベルクソンはさらに「私の身体を取り巻く諸対象は、それらに対する私の身体の可能な行動を反射するのである」(MM15-6) と述べるに至る。また「私はイマージュの総体を物質と呼び、これらの同じイマージュがある特定のイマージュ、すなわち私の身体の可能的行動に結び付けられたとき、それらを物質についての知覚と呼ぶ」(MM17) とベルクソンは定義している。

こうした仕方で知覚を描こうとするベルクソンの目的は何か。それは外界から孤立して立てられた主体、或いは物質のみから出発して意識を導出するような古典的な認識論ではなく、イマージュのただ中で知覚が成立していることを示すことである。ベルクソンはイマージュという事物と表象以前のものから出発したことによって实在論と観念論の問題を解消しようとしたのだから、当然知覚もイマージュと根本的に異なるものである訳にはいかない。そうではなく、知覚は決してイマージュと本性的に異なるものではなく、どちらも同じ地平に存在しているとベルクソンは考えているのである。というのも、もし物質から知覚へ移行するのに何かを付け加えなければならぬとするなら、その付け加えは全く理解できないものになるだろう。そこでベルクソンが取る方法は、いわば減少の道である。ベルクソンは以下のように述べる。

「したがって知覚は、権利上は、全体のイメージであるはずであり、事実上は、ただ利害関係のあるものに縮減されているのだから、説明すべきことは、知覚がいかにして生まれるかではなく、いかにして自己を限定するかということである」(MM38)

イメージの総体に対して何かを付け加えるのではなく、そこから私の身体を介して一定のイメージだけを切り出し浮かび上がらせる事によって知覚が成立しているならば、先の困難は解消されるだろう。その時知覚は決して主観的なものではなく、客観的なものとして我々の外に存在することになる。ベルクソンが純粹知覚という概念を用いるのはまさにこのためである。この純粹知覚論の主旨は以下のようなものであった。それはイメージのうちに「没人格的な基底があり、そこで知覚と知覚された対象が一致しているということ、そしてこの基底は外在性そのものであること」(MM69)を示し、「個人的な偶有性は、この非人称的な知覚に接木されているということ、この没人格的な知覚が事物についての我々の認識の基礎そのものにあること」(MM30)を確立することにある。繰り返しになるが、つまり我々の知覚における主観性は知覚そのものではなく、そこに介入する記憶によってもたらされるものであり、我々の知覚の基盤となる「純粹知覚」からすれば、我々の知覚とその対象は部分的に一致しており、本性的にも異ならないことを示そうとするのである。この時イメージの総体と我々の知覚は、全体と部分という関係にあるといえるだろうⁱⁱⁱ。

3. 事実上の知覚

しかし「実際には、記憶に浸されない知覚というものはない」(MM30)とベルクソンが述べるように、純粹知覚とは権利上のものであり、事実上の知覚には記憶の働きが認められる。ベルクソンによれば純粹知覚という我々の知覚の基礎をなす土台は、「我々の記憶がそこに付け加えるものに比べれば取るに足らないもの」(MM68)でしかない。しかしこの実際の知覚に働いている記憶には二つの形式がある。ここで問題にするのは『物質と記憶』の第2章でベルクソンが挙げる身体運動に属する習慣的記憶と精神に属する真の記憶という区別のことではない。メイヤサーによれば、それは第1章において既に以下のように提示されている。

「記憶は、それらが直接的知覚の基盤を記憶のテーブルクロスで覆う (recouvre) ものとして、そしてまた多様な諸瞬間を縮約 (contracte) させるものとしてのそれら二つの形式があり、我々のものの認識の主観的側面という、知覚の中に個体的意識の主要な提供物を構成する」(MM31)

これらは精神によって働く記憶力の内部に見いだされる区分である。いわば、前者は「想起としての記憶力」であり、後者は「縮約としての記憶力」であると言えるだろう。「想起としての記憶力」は我々の知覚を補完するような記憶を元の知覚に付け加えている。こちらは『物質と記憶』第2章においては再認一般として「身体だけで可能な再認」と「注意的再認」に分けられるものである^{iv}。

例えば、後者の「注意的再認」と呼ばれる働きに対してベルクソンの考えを見てみよう。ベルクソンは知覚に対し記憶は、現在の知覚に類似する過去イメージを「イメージ記憶 (image-souvenir)」の形で送り返すことでこの知覚を二重化するとされている。彼によれば知覚は、精神と現在の対象との単なる接触では決してなく、それを解釈しながら補完するイメージ記憶が全面的に浸透していると『物質と記憶』第3章の冒頭において述べられる。イメージ記憶それ自体は、真の記憶である純粹記憶から物質化される途中のものであり、記憶と知覚の双方の性質を帯びている。ある点では、「イメージ記憶は、生まれつつある知覚 (perception naissante) と定義されるだろう」(MM147)。またこの純粹記憶は、権利上は独立しているがそれ自体現れることはなく、それがイメージ記憶として知覚に付け加わるには身体の運動図式を基盤にしなければならない。本稿で深く立ち入ることはできないが、こうした運動図式はあらゆる再認の条件になりうるのである。またこうした純粹記憶が持続と根本的なところで異なるものではないことも指摘しておこう^v。

話を元に戻そう。注意的再認によって細部の欠けている知覚を補い、知覚を豊かにし、さらに多くの想起が呼び起こされることになる。純粹知覚が権利上のものに留まるのはこのためであり、だから元の知覚はしばしば、「古いイメージを思い出させるための「記号 (signes)」に過ぎない」(MM30)ものになる。それだけでなく、「我々の現在の知覚を解釈することのできるすべてのイメージ記憶は、非常に上手く我々の知覚にすべり込んでいるので、我々はもはや、知覚であるものと記憶であるものを見分けることができない」(MM113)ほどである。このことをベルクソンは読書に関するゴルトシャイダーとミュラーの実験の例を挙げて説明している。

「言葉が一字一句読まれることを有名な研究の中で主張していたグラスハイに反して、これらの実験者たちは、流れるように読むことが真の予見の働きであることを明らかにしたのだが、我々の精神は、あちこちでいくつかの特徴を摘み取り、イメージ記憶によって隙間の全体を埋めており、イメージ記憶は紙の上に投射されると、実際に印刷されている文字に取って代わり、我々にその錯覚を与えるのである。このように我々は絶えず創造しあるいは再構成している」(MM113)。

これは我々がゆっくり文章を確認しながら読むのではなく、素早く文章を読もうとしてい

るとき起こる働きである。そのとき我々はある単語や言い回しの最初の幾つかの文字を確認しただけで既に何が書かれているのか把握することができる。その単語の綴りが間違っていたとしても意味を補完して理解できるし、またもっと言えば、その間違いが僅かなものなら間違いがあった事自体に気づかないかもしれない^{vi}。

この時やはり我々は現実の知覚を一種の徴として用いることで、それに記憶を付け加え知覚を豊かにしており、そこから知覚の便利さと速さが得ていると言える。しかしその時多くの錯覚の原因もここにあると言える。

4. 縮約として記憶力

しかし本稿で重要なのは第二の記憶力の方である。その縮約としての記憶力は、想起としての記憶力のように現在へ過去の記憶を放射するのではなく、現在そのものを構成しているというのだ。実際、ベルクソンによれば我々の知覚はどんなに短くとも幾らかの持続を占めているため、多数の瞬間を相互に延長する記憶力の働きが必要となる。

しかしこの主張は『物質と記憶』第1章の根本にあった主張と大きなズレがあるように思われるのではないか。これまで我々は知覚する対象において、その対象そのものであるところのイマージュ自体を知覚しているということになっていた。物質には隠れた側面や見通すことのできない深層などは一切認められていなかった。だが縮約としての記憶力を導入すればそうはいかないように思われる。

それまでは減少によってイマージュの総体の部分を知覚しているという理由で我々はイマージュそのものを直接認識していたのであった。しかし知覚に縮約の契機が入るならば、それは我々の知覚が総合によって成り立っていることになり、その総合される素材の本性を見出すことができないように思われるからだ。

ところでこの記憶力は持続のリズムに関するベルクソンの理論に由来するものである。そのリズムについてベルクソンは光の振動の例を使って説明する。それによれば、例えば赤い光は物理学が扱うように1秒間に400兆の等質的な振動に分解できるのだが、記憶はこの膨大な振動をも圧縮して質としての知覚を形成しているというのだ。

例えばメイヤスーはここで、ベルクソンがこの問題について述べているテキストを引用しつつ、その批判をしている。まずベルクソンのテキストをみてみよう。

「認められる二つの色の還元不可能性は、とりわけ、緊密な持続に由来するものであって、そこにはそれらの色が我々の諸瞬間のうちの一つにおいて行っている無数の振動が縮約されているのだと考えることはできないだろうか。もしこの持続を引き伸ばすことができるのだとしたら、このリズムが遅くなるにつれて、それらの色はあせて引き伸ばされ、継起する諸印象となり、それらはおそらく彩られているとしても、次第に純粋な振動と一

致するようになるのが見られるのではないか。この運動のリズムが、例えば低音階の場合のように、我々の意識の習慣と一致するほどに十分にゆったりとしている場合には、知覚される質は自ずから分解し、一つの内的連続性によって互いに結ばれた、反復・継起する振動となるのが感じられるのではないだろうか」(MM227-8)

ベルクソンによれば、これはつまり、物質そのものはある種の思考実験によって取り戻せるのであり、そのためには持続のリズムの様々な変化、緊張には様々な程度があるという考えを認めれば良いというのである。そこで我々が持続のリズムをゆるめれば収縮としての記憶が作っていた質は分解され、等質的な物質の振動へと引き伸ばされることになると思われている。

しかしこの「脱一縮約」的な操作は本当に可能なのであろうか。メイヤスーはこのベルクソンの主張と逆のことを考えることによって、この命題の問題を指摘しようとする。それは「持続のリズムの減速が、ベルクソンが言うように質の漸次的ないし「引き伸ばし」に相当するのだとすれば、逆に、色の漸次的消滅の経験や、低音階への音の漸次的移行は、常に持続のリズムの減速に相当する、と主張しなければならないだろう」^{vi}というものである。しかし実際にはそうではないように思われる。というのも、奏でられる音が低いからといって、譜面やメトロノームが要求するリズムが変わることはないだろうからである。持続のリズムと音階の高低は関係ないだろう。

したがって先の箇所ではベルクソンが言うような仕方で知覚の「脱一縮約」的な操作を行い、物質そのものを記憶の覆いから解放することは不可能に思われると言うのだ。ここで知覚を縮約としての記憶力から解放することの困難は、この記憶力が知覚の質そのものを構成しているという想定にあることがわかるだろう。こうしてメイヤスーは「縮約としての記憶力は、純粹知覚理論の主要な成果、つまり即時の認識可能性という成果を無に帰してしまうように思われる」^{vii}と主張する。

ところでそもそもベルクソンが縮約としての記憶力を導入しようとしたのは何故であろうか。それはまさに「基礎的な物質についての科学が、最小限の意識的な持続を、それよりもはるかに早い出来事へと一具体的に言えば光の振動へと一分解するという事実である」^{viii}とメイヤスーは指摘する。縮約としての記憶力は、こうした科学的な量と意識における質関係を繋げるために用いられたものである。

確かに『物質と記憶』第1章の基本的な考えでは、我々の知覚はイメージ全体から見れば部分であるとしても、あくまで物質そのものを捉えているのであった。そこに記憶と感情という主観的な側面を構成するものが入り込むとしても、「物質の感覚的諸性質そのものは、もし我々の意識を特徴付ける持続の特殊なリズムからそれらを取り出すことができるならば、それ自体において、内から認識されるものであり、外から認識されるのではない」(MM72)

と述べられている。

そしてベルクソンが同じ問題を論じている『物質と記憶』第4章の箇所でも、同じように我々の知覚の質と物質的な量の関係を明らかにするには、「これらの運動を内的振動の形でこれらの諸性質の内に置かなければならないし、表面で見受けられるほどにはこれらの振動は等質的ではなく、これらの性質は異質的ではないと考え、二つの項のみかけの相違の由来を、諸瞬間を区切るにはあまりにも短い持続の中にある意味で無限ともいべきこの多数のものが縮約されねばならぬという必然性に帰するしかない」(MM230)と述べられている。

これはつまり質と量の移行の問題であって、この知覚と物質の区別と一致はやはり縮約としての記憶力の問題だと言われており、知覚の異質性は記憶による諸瞬間の圧縮のせいであるように述べられる。

確かにベルクソンは等質的な振動を記憶の働きによって縮約することによって、現在において知覚の質的な様相を形作っている、と述べているようにみえる。しかし気をつけなければならない。ベルクソンにとって根本的な理論とは持続ではなかつたろうか。だからここでまず、記憶力ははじめに存在する諸瞬間の総合として働くのである、と考えることはできないことを忘れてはならない。そもそも存在とは持続することを免れ得ないのであって、現実には常に異質的であるはずだ。これは逆に考えられなければならない、純粹知覚こそが、縮約の働きを弛緩して、異質性が希薄になったものなのである。

だからこそベルクソンは何度も純粹知覚が「権利上」のものであることを述べているのだ。そしてベルクソンが述べるような実在への一致とは、純粹知覚におけるような等質的振動への一致ではなく、持続における連続性への一致なのである。そしてそれこそ我々が扱う「直観」に関わるものであるだろう。しかし付言しておけば、ここで捉えられる物質とは、「表面で見受けられるほどにはこれらの振動は等質的ではなく、これらの性質は異質的ではない」(MM230)と言われていたように、実在論が語るような等質的な振動と完全に一致するわけではないが、それでも性質そのもののなかに見出されるものであるだろう。

5. 直接所与を捉えるものとしての純粹な直観

こうしてようやく問題は、「直観」による実在への一致や直接的な認識とは何かという場に移ることになる。

ベルクソンは『物質と記憶』において「直観」という言葉を完全に一義的に使用しているわけではない。「我々の外界の知覚を開花させる現実的な、いわば瞬間的な直観の土台は、我々の記憶力がそこに付け加えるものに比べれば取るに足りないものであることに異論の余地はない」(MM68)とベルクソンが述べる時、「直観」は記憶力が付け加わる基礎になるものであって、実在の認識とは程遠いものに思える。というより、ここで直観は知覚と同義に使われており、いわばカントの言う感性的直観に近い意味で使われている。ベルクソンは

『物質と記憶』第1章におけるこの純粹知覚という考えによって、我々の認識が主観的なものに留まることなく物質の側で知覚の客観性を保持していることを示そうとしたのだった。そしてその際知覚は純粹な認識ではなく有用性によって限定されているとすることがベルクソンの知覚論なのであった。

しかしベルクソンはこれとは別の直観を『物質と記憶』のなかで言及している。ベルクソンの知覚論が明らかにしたことは、我々の知覚する現実があるのままの實在ではないということである。知覚されるものは、實在全体から我々の生きるための関心に沿って切り取られ、それ以外は素通りさせるという仕方現実のものとなる。そのことをベルクソンは『物質と記憶』第4章の冒頭で「身体は常に行動へと向かうものであって、精神生活を行動のために限定することをその本質的機能としている」(MM199)と述べている。また加えて、知覚が生活のための有用性を目指す身体の可能的行動であるのと同様に、知覚を具体的かつ判明にする記憶の投射も、目的とする行動のために現在の状況を補い照らすのに有益な記憶の選択をしている。ここにおいても知覚の加工や再認による覆いがあるといえる。

とするならば、持続する實在の認識のためには、こうした有用性による状況への適応を求めた認識を試みなければならないだろう。ベルクソンの直観は、有用性を目的としない實在認識の方法として『物質と記憶』第4章ではじめて提示されたのである。「普通事実と呼ばれているものは、直接的直観(intuition immédiate)に現れるがままの現実ではなく、現実的なものが実践上の関心と社会生活の要求に適応したものなのである。純粹な直観は、外的であろうと内的であろうと、分割不可能な連続の直観である」(MM203)と述べられるときの直観がそれにあたるだろう。不可分な連続、つまり持続の直観こそが明らかにしなければならない問題なのだ。

そこでまずベルクソンは、「経験をその源泉にまで求めに行くこと、というよりむしろ、経験が我々の実利の方に屈折して固有な意味での人間的経験になるその決定的な曲がり角の向こうへと経験を探しに行くこと」(MM205)を要請する。「こうした欲求が作り出したものを破壊するならば、我々は直観の最初の純粹さを回復し、現実との接触を取り戻すであろう」(MM205)と述べている。こうして人間的経験以前の経験とはいかなるものかが問題になるのだが、その前に少しその後述べられる文章を見ておきたい。

6. 積極的側面—微分と積分

というのも、ベルクソンがその後で「積分の努力」という時、それは知覚のある種の習慣を放棄して直観に立ち戻ることが消極的な側面にすぎないことを意味しているように思われるからだ。もちろんそうした実利的関心を取り除くこと自体も難しく、直観の積極的側面と言えるような方法の前提でもあることは間違いないだろう。しかしベルクソンは、哲学的探求がそこで終わらないと主張する。

「我々が経験の曲がり角と呼んだものに身を置いたとき、すなわち直接的なものから有用なものに移る道程を照らしつつ我々の人間的経験の曙光を利用したとき、さらに残っている仕事は、こうした現実の曲線から我々が見出す無限小の諸要素によって、背後の暗がりに伸びている曲線そのものの姿を再構成することである。この意味で我々の解するような哲学者の仕事は、微分から出発して関数を決定する数学者のそれとよく似ている。哲学的探求の最終段階は、まぎれもない積分の努力なのである」(MM205)

この文章は何を意味しているのだろうか。我々は直観によって人間的経験の先に、つまり実利的な実在の区分の先にある純粋な経験を探しに行くことが求められていたのであった。だがそうしたあとに、「現実の曲線から我々が見出す無限小の諸要素」を「微分」し、そこから「背後の暗がりに伸びている曲線そのものの姿を再構成する」という「積分」することが必要であるとベルクソンは述べている。直観によって得られた不可分な連続の経験を、微分し、さらに積分によって再構成する。実のところ、これは先に問題になった等質的振動という量と知覚の質の移行にも関わるものなのではないか。ベルクソンが縮約としての記憶力や持続のリズムの縮約と弛緩で説明しようとしたものは、「量としての物質」と「質としての物質」が同じ「物質」に存することであり、両者の関係は持続において理解されるということであるだろう。

さらに言えば、直観によって純粋な実在を捉えることが消極的なものに留まる理由は、純粋で人間的経験以前のものであるがゆえにそのままではどうすることもできないからであると思われる^{*}。そしてそれを微分し、積分することによって再構成し有用なものにすることから、実在の新たな区分を見出すことが直観の積極的側面であるのではないか。となれば、これはある種の創造に関わる観点であるだろう。

ベルクソンによれば、こうした純粋な実在への直観というこの方法の策略は単に、有用的認識の観点と真の認識とを見分けることに存する。

7. 不可分な連続としての運動—持続する物質の実在

ベルクソンはこの方法を適用して得られる諸結果から、我々の研究に関係あるものを引き続き取り出すとして以下の4つのテーゼを上げている。

「Ⅰ—どんな運動も、静止から静止への移行である限り、完全に不可分である」(MM209)。

「Ⅱ—数々の現実の運動が存在する」(MM215)。

「Ⅲ—物質を、絶対的に決定された輪郭を持つ独立した諸物体へと分解することは、す

べて人為的な分割である」(MM220)。

「Ⅳ—実在する運動は一つの事物の移送 (transport) というよりも一つの状態 (état) の移送である」(MM226)。

ここで語られたことは、要するに、不可分な連続性としての運動と、そうした運動が実在すること。そこから固体的な形で思い起こされる物体以前の物質の存在があること。そうして最後に、状態の変化としての運動こそが実在する運動であるということだ。運動が空間的变化ではなく、時間的变化であるということ。これはまさに持続であって、物質の持続を表しているだろう。

では真に存在するものはこのような質的な運動だとするなら、等質的な振動はどうなるのだろうか。ベルクソンは「もし感覺的性質の多少とも等質的な基体に関する我々の信念が根拠を持つとすれば、それは性質そのものの中で、あたかもこの感覚が推測されながら認知されない細部をはらむかのように、我々の感覚を超える何ものかを把握あるいは判読させるような働きによる以外ありえない。とすればその客観性、すなわちそれが実際に与える以上に持つものは、まさしく、我々がほのめかしたように、それがいわば繭の中で行う莫大な数の運動にあるだろう」(MM229) と述べている。

これはやはり、量としての物質と質としての物質を乖離させないためには、「これらの運動を内的振動の形でこれらの諸性質の内に置かなければならない」ということに他ならない。しかし純粋な直観によって捉えられる物質は、持続においても延長においても、不可分な運動であるはずだ^{xi}。等質的運動は明らかに事物の移送を思い起こさせるが、実在する運動は状態の移送だからである。

あるまとまりとしての固体的な物体というものは空間において描かれるものである。だからこうした物質を捉えるには空間的ではない仕方によるのでなければならないだろう。この点をベルクソンは「ある程度まで、延長を去ることなく空間から離れることができるわけであり、この点にこそ直接的なものへの復帰があるだろう。というのも、我々は空間を図式的に捉えることしかできないけれども、延長はというと、それこそ本当に知覚するからである」(MM208) と述べており、それが可能であることを示している。

また持続する物質の実在が意味するところは、我々が普段行っている物体の分節が人為的なものでしかないことでもあった。ベルクソンによれば「固体性は物質の絶対に明らかな性質だとはいえない」(MM223-4) のである。「もの (choses) とその環境との分離は、絶対的に明確なものではありえない。(…) それはただ欲求の示唆と実生活の必要だけにしたがって、延長物の連続の中に区画を引くのである」(MM235)^{xii}。

そのため純粋な直観が捉える実在する物質としての不可分な運動を、微積分によって等質的運動と知覚の質的様相に分解できるからといって、もともと実在は等質的運動からなっ

いたのだと考えるのは間違いである。それはベルクソンが『試論』において、持続を瞬間の連続に分節できるとしても実在は運動そのものの方なのだ、と指摘したことと同様に、回顧的錯覚なのである。

そしてこうした分節は空間においてなされるのだから、理論上は無限に分節可能であるだろう。しかしそれが可能なのは、直観の把握する持続する物質としての実在が、不可分な連続としての運動であり、そこにおいては固体のような物体以前の物質が、状態の変化として存在するからに他ならない。

・結論

本稿ではベルクソンの知覚論を見ていきながら、等質的な振動と我々の知覚の質的様相の関係についての問題を通して、実在する物質とは不可分な運動そのものであって、まさにこうした持続を捉えるのが直観であるということを示した。そしてこうした直観は、実在への接触という努力と、積分のように実在を再構成する努力の2つの仕方を往復する必要があるだろう。それによって我々は、不可分な運動を人為的に分解し、理解可能にし、また道具のように使用できるようにすることが可能になるのである。このような有用なものに再構成される前の認識こそ、人間的経験の前にあると言われるものであり、本稿で問題にした直観であると言えるだろう。

ここで、序論で示した問題に戻るならば、ここでの直観は我々が原初に感じるものはなにか形や輪郭を持つ以前の存在の直接的な体験に立ち戻ることであるといえるだろう。それは「何かを経験する」とも言えない、意味や言葉になる前の体験そのものであり、独特な感覚としか言えないものを我々ははじめに感じている。そしてその体験は言葉を通して意味を与えて理解されることによって、人間的経験として、深く考えたり他人に伝えたりすることが可能になるのだ。というのはこの独特な感覚に対処するためには、何か言葉によって意味を与えてそれに向けて行動する必要があるからだ。そうして有用なものに変えられた経験を我々は普段の生活で使っているのだ。

となれば、例えば知覚以外にも、感情の上で意味として取り出せないものは、その取りだし方（言葉の名付け方）によって、別の経験になってしまうのではないか。そしてこうした言葉による分節化有用化は、それが可能であるという以上に、言葉によってしか経験にならないともいえるだろう。となれば元の経験に形を与え表現することがある種の創造的な行為であるといえるのではないか。

ところでベルクソンはこれを知性の働きであるとするだろう。ベルクソンの哲学の中で、直観と同様に知性がいかなるものかは非常に重要である。それは知性の働きが直観と平行して創造性の一端を担っているからである。

しかしここに非常に大きな問題がある。先ほどベルクソンにおける実在とは不可分な運動

そのものであると述べた。だが、それが本当に無限定な何かだとしたら、我々は如何にしてそうした存在に形を与えるのだろうか。単に知性によって支配的に形を与えるなどということが出来るのだろうか。知性という枠組みによって実在が形を変えとしても、その枠組自体は実在の内実なしにどうやって形作ることが可能なのか。となれば、こうした不可分な運動としての実在は、単に無限定というよりは、そのなかに潜在的な傾向とでもいうべきものを孕んでいるように思われる。

しかし本稿ではこうした「知性の発生」に関わる問題には大きく触れることはできなかった。また『物質と記憶』においては、この点について詳細に語られてはいない。この点は科学に対するベルクソンの見解と合わせて『形而上学入門』や『創造的進化』を待たなければならぬだろう。また直観についても、後の著作で語られるような「共感」や「反省された本能」といったタームも出てきてはいないし、直観が何を捉えるかは示しされても、「いかにして」それが行われるのかについてははっきりしないように思われるが、それらを明らかにすることは今後の課題としたい。

ⁱベルクソン本人の著作からの引用は、原則本文中の引用直後に以下の略号を用いて引用箇所の指示をする。またその際、カドリージュ版のベルクソン全集 (Bergson, H, 2010, *Matière et mémoire*, PUF, Quadrige) を用いた。同じ箇所からの引用が続く場合は、指示の反復を省略したところもある。(例: MM205)

使用した著作の略号・邦訳題名一覧

MM *Matière et mémoire* 『物質と記憶』

また引用される文献の訳については、参考文献表に付記した既存訳などを参照しつつ、適宜訳者の責任で変更してある。

ⁱⁱこうしたイマージュの正当性は、例えば杉山によれば「実在と現れを別々のものとしてたてる限り生じる困難を避けるためには、最初から点Pの視覚イマージュを指定するしかない。(…) 実在とその「見え」があるのではなく、あるのはただ「見えるP」だけなのだ。つまりこれは、実在を最初から「イマージュ」として記述することにほかならない」と述べられる通りのものであろう。(杉山2006,p.136)

ⁱⁱⁱ付け加えるならば、確かにベルクソンは「実際には、記憶に浸されない知覚というものはない」(MM30) と述べており、事実上の知覚に主観的な側面があることは認めている。また後に考察することになるが、感情というものも知覚に加わるため、知覚は主観的なものだと思われやすいだろう。だから純粹知覚は権利上のものであって、事実上の知覚ではない。しかしベルクソンはそれがあくまであとから知覚に混ざったものであり、純粹な知覚においてはイマージュそのものと本性的な差異はないと述べるのである。

^{iv}例えば「注意的再認」と呼ばれる働きでは、知覚に対し記憶は、現在の知覚に類似する過去イメージを「イメージ記憶 (souvenir-image)」の形で送り返すことでこの知覚を二重化されている。ベルクソンによれば知覚は、精神と現在の対象との単なる接触では決してなく、それを解釈しながら補完するイメージ記憶が全面的に浸透しているのである。

^v例えば杉山は「ベルクソンが「記憶 (mémoire)」と呼ぶ作用は、そのもっとも根本的な相において、持続の主観性であるような未完了的な生成と別のものではないと述べてる。通常の意味での「記憶」とは、そのままでは流れ去り消えるような過去の、現在への繋ぎ止めであり保持であるのに対し、ベルクソンはその種のイメージを最初からあっさり否定してしまう—「記憶」とは、現在から過去への遡行 (regression) なのではなく、過去から現在への進行 (progress du passé au présent) なのである」(MM169) からだ。(杉山2006,p.98)

^{vi}これに関連して少し前に日本のネット上で話題になったものを紹介しよう。これは文章の最初と最後の文字があってれば並びが違っていても正しく読めるという実験結果である。

こんにちは みさなん おんげき ですか？ わしたは げんき です。

この ぶんしょう は いらぎす の ケブンツリジ だがいく の けゆきんう の けっか にんげ は もじを にしんき する とき その さしいよ と さいご の もさじえ あいてつれば じばんゆん は めくちちゃ でも ちんやと よめる という けゆきんう にもづいとて わざと もじの じんばゆん を いかれてて あまりす。 どうぞ？ ちんやと よちめう でしょ？

どうだろうか。ただ知覚されているだけでは読めないはずなのに、正しく読めていないだろうか。それが記憶の中の過去のイメージによる補完の働きなのである。そこでは現在の知覚は極僅かものしか使われていない。ただしここでのケンブリッジ大学での研究というのは都市伝説のようだ。この詳細は以下のサイトから知ることができる。(http://www.kotono8.com/2009/05/10yometeshimau.html)

^{vii}Meillassoux,2007,p.77

^{viii}Meillassoux,2007,p.78

^{ix}Meillassoux,2007,p.80

^xこのような認識は、一般観念と個体の前の認識である「特徴的性質或いは漠然とした感じ (un sentiment confus de qualité marquante ou de ressemblance)」(MM176) や、1章の冒頭の「もっとも漠然とした (le plus vague) イメージ」と言われるものと似ていると思われるが、その点について本稿では深く立ち入れなかった。

^{xi}この点について本田も以下のように指摘している。「生活の要求によって外的知覚に付加されたものから解放された、物質についての直接的な洞察は、物質が運動・動性そのものであることを示しており、物質的事物のうちに知覚される質の変化は実在的運動である」本田2009, 101頁

^{xii}杉山によれば、こうした生態学的な観点は『試論』以来のものである。例えば人間と他の脊椎動物や昆虫とは、それぞれ異なる空間認知を行っているだろう (cf.DI71-2) とベルクソンは見積

もっていた。様々な生物はそれぞれの世界を有するわけである。(杉山2006, 159頁)

参考文献

杉山直樹、2006、『ベルクソン 聴診する経験論』(創文社)

本田裕志、2009、『ベルクソン哲学における空間・延長・物質』(晃洋書房)

Quentin Meillassoux, 2007/4, Soustraction et contraction; À propos d'une Remarque de Deleuze sur Matière et mémoire, in *Philosophie*, n.96. (Pasis : minuit), pp.67-93.

La réalité et l'intuition chez Bergson

KOBAYASHI, Tsuyoshi

Nous considérons, dans cet article, le concept de l'《intuition》 dans *Matière et Mémoire* de Bergson. Chez Bergson, l'《intuition》 occupe, avec la durée, une place cruciale. Alors, c'est l'《intuition》 dans le sens de la première période de Bergson qu'il traite dans *Matière et Mémoire*. Nous essayons, d'éclairer la signification de l'《intuition》 utilisée dans cette œuvre comme méthode pour toucher la réalité elle-même.

Notre sujet étant l'image et la perception pure, nous traitons dans cet article, le problème de la 《mémoire-contraction》. Il est question, dans ce contexte, si la matière perçue est un être quantitatif ou celui qualitatif, irréductible à la quantité. Nous éclaircissons ainsi le fait que le but de l'《intuition》 dont parle Bergson dans cette œuvre consiste à saisir la réalité qu'est la 《durée》, comme mouvement indivisible avant qu'y intervienne l'acte corporel.